

イノベーション・プラットフォームが支える市民によるまちづくりと若者人材育成

日本アイ・ビー・エム株式会社 スマート・シティ事業 事業企画推進担当 次長
横田 由美子

日本アイ・ビー・エム株式会社 マーケティング&コミュニケーションクラウド・マーケティングデベロッパー・セグメント担当
服部 京子

IBMが考えるスマートなまちづくり

IBMは地球を取り巻く課題に対応する「スマート・プラネット」というビジョンを2008年に打ち出し、世界各地で、データとICTを活用してまちをより良くする「スマート・シティ」を進めています。ITを活用した、住む人々が暮らしやすい魅力的なまちづくりでは、まちから生み出されるデータそのものも資源と考える新しい発想や、産官民学の知見を融合したアイデアをITと組み合わせたデータ活用が重要となります。

IBMが考えるイノベーション・プラットフォーム

100名を超える大学生、専門学校生、高校生らが参加した「よこはまユースアイデアソン・ハッカソン」。日本IBMはオープンイノベーションによるこの新たな取組を技術／開発環境面でご支援しました。



日本IBMは当イベントで、「Bluemix」というクラウドを基盤とするアプリケーション開発・実行環境を2ヶ月間無償で提供しました。

通常はアプリクラウド基盤の開発環境「IBM Bluemix」セッション開発にとりかかるまでに、ハードウェアやミドルウェア、ネットワーク環境など、さまざまな準備が必要になります。しかし、Bluemixでは、様々なプログラミング言語に対応した実行環境をたった30秒で立ち上げることができ、数分後には開発作業を始めることができます。さらに、アプリケーションに欠かせない機能であるデータベースやセキュリティはもとより、モバイル向けプッシュ通知機能、ビッグデータ解析機能、さらにIBM Watsonのテクノロジーを活用した人工知能の機能など、先進的かつ有用な機能が80以上も部品化され、カタログ化されています。ユーザーはこうした機能をカタログから選ぶだけで、簡単に高機能のアプリケーションを作ることができます。Bluemixはまさに、若い感性を最大限に引き出すイノベーション・プラットフォームといえるでしょう。

スマートなまちづくりにおける開発環境と人材育成

当イベントを通じて確信できた2つの仮説がありました。ひとつは、「市民参加によるデータを活用したまちづくり」とその開発環境としてのBluemixの親和性です。日本IBMは事前のBluemix研修会、ハッカソン当日の技術支援に加え、「成果発表会」に向けた開発で学生が遭遇したBluemixに関する疑問・悩みに応じてアドバイスする相談会を2度実施しました。

習得済の開発言語やレベルは様々でしたが、1ヶ月とい

う限られた期間で、各々アプリケーションを完成し報告会当日を迎えられました。最優秀賞となる横浜市政策局長賞を受賞したのは、なんと高校1年生のグループでした。初めてBluemixに触れた学生がわずか数分で実行環境を構築できた時には「環境構築だけに何週間もかかってしまうこともあったのに」と先生が驚かれていました。

様々な言語に対応し、数多くの機能を利用でき、実行環境をすぐに作れるBluemixの特長が力を発揮し、学生たちの成功体験に貢献できました。

もう一つはユース・ハッカソンの若者人材育成効果です。

単にアプリケーションを開発するだけでなく、若者が直接「社会に接し、発信できる仕掛け」が当イベントには組み込まれていました。学生は市のリアルなデータを用い社会課題と対峙し、自ら考えた解決案をイノベーション・プラットフォームを用いて社会での実利用を意識して開発。報告会では100名を超える参加者や大人（自治体幹部を含む）に成果物をプレゼンテーションし、ポスターセッションも経験しました。中には自発的に市内公共機関に電話を掛け、まちのデータを集めたチームもありましたし、作成したアプリケーションを広く他自治体にも展開していきたいと発表したチームもありました。

民間による出前授業では学生が親や教師以外の「大人と接触」する事の教育効果が確認されています。当イベントで経験した「能動的な社会参画」の経験は、更に、若者に回りしれない教育効果があったと思います。

ユースアイデアソン・ハッカソンはデータとICTを用いた若者の社会的課題解決能力向上に加え、社会を身近に感じ、社会参画意欲向上のきっかけとなる、まさに未来を担う人材育成の機会であったと言えるでしょう。



事前研修風景



ユースハッカソン風景